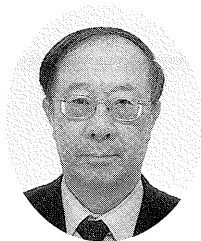


巻頭言



果樹の優良種苗とは

(財)日本植物調節剤研究協会 評議員
(社)日本果樹種苗協会 専務理事

間 苧 谷 徹

果樹の優良品種とは質問すると、カンキツなら、皮が剥け易く、じょうのう膜が薄く、種子がなく、甘く、適度に酸味があり、芳香があり、剥皮した時に手に果汁が付かない等の条件を備えた品種ということになる。栽培農家側からいうと、加えて、栽培性が優れることである。栽培性の中身は、特殊な技術を使わなくても豊産性で、隔年結果性がなく、病虫害にも強いということである。更に言えば、当面は無理と思うが、品種に自家摘果性（樹勢に応じて、自分で落果させる能力）があると、大いに省力化につながる。

“病虫害に強い”の中で、大学の植物病理学の講義ではウイルス・ウィロイドが主役の一翼を担っているが、実際の果樹農業の現場となると、脇役になっているように思える。ウイルス・ウィロイド病は、人間でいえばエイズに相当する。一度かかると死ぬまで直らない。そのうち樹が枯れる恐ろしい病害であることは、恐らく多くの農家は知っている。

過去の歴史をひもとくと、昭和36年頃にブドウ「甲州」に、糖度が健全樹と比較して5～6度も低く、酸も多くなる樹が多く見られるようになり、この様な果実は“味なし果”と呼ばれた。リンゴでは、昭和45年頃より、高接病が顕在化し、樹が枯死する例も見られた。カンキツでは、昭和53年に温州ミカン「宮本早生」にトラミカンが発生した。これらは、全てウイルスによるものである。最近ではカンキツ「不知火」にウィロイドが拡散している。ウイルス・ウィロイドの病徴は、細菌病等のように、直ぐ目に付くものではなく、じわっとくる場合が多い。直ぐ目に付く病害には、果樹経営に悪影響を与える

こともあり、栽培農家は敏感に反応する。

品種更新を行う際に、無毒の穂木から苗木を育成すれば、ウイルス・ウィロイドに罹病することは原則としてない。しかし、苗木からでは未収益期間が長いので、その期間を短縮するために、高接ぎ更新を行うことが多い。この時、接がれる樹（中間台）がウイルス・ウィロイドを保毒していれば、この樹から発生した枝を穂木として再利用すると、ウイルス・ウィロイドが拡散することになる。

高接ぎすると、ウイルス・ウィロイドに汚染される可能性が高くなることは、多くの栽培農家は知っている。が、多くは知らぬ振りを決め込み、当面の利益を優先させて高接ぎ更新をする場合が多い。当面の利益を優先させないといけないほど切羽詰まっているのが、現在の果樹農業の実力かも知れない。

行政側も、新品種更新の一つに高接ぎという方法を考えている。未収益期間を短くするにはこの方法が最も良いが、大きな落とし穴がある。上述したように、中間台がウイルス・ウィロイドを保毒していることがある。行政側が永続性のある果樹農業を考えているなら、優良品種の更新を高接ぎで進める際には、中間台のウイルス・ウィロイドの検査をまず最初にすべきである。しかし、これは“言うは易く行うは難し”である。このためには、圃場で簡便に調べる方法（一部のウイルスでは、簡易検定法が確立しているが）の確立と、検査システムの構築が必要である。研究機関も行政も、是非、方法とシステムの確立を急いで欲しい。同時に、農家にも高接病の恐ろしさを十分に啓蒙しないと、禍根を残すことになる。